
Truth ~ 邂逅の夜 ~

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Truth（邂逅の夜）

【Nコード】

N5433B

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

目をそらさないことを選んだ少女アーフィと、魔法を使える青年ロイの一夜の邂逅。夜の草原に浮かび上がる透明な村を前に、知られざる世界の過去をロイは語る。「目をそらしたら、本当が分からなくなるから」

0 . ある青空教室にて

「眼をそらしたらね、アーフィ」

おだやかな声で、先生が言う。

「ほんとうのことが、見えなくなってしまっことがあるんだ」

ほんとうのこと？

先生の向かいがわの切り株に座っていたアーフィは、声に出さずに呟いた。

目をそらすと、今まで見えていたものが見えなくなる。

それは、当たり前のことだ。

でも、“ほんとうのことが見えなくなる”ってどういうことなんだろう。

先生が何を言いたいのかわからなくて、首をかしげる。

そうしたら、見える世界も一緒にかたむいた。

さっきまでは見えなかった、先生が座っている切り株の向こうがわが視界に映る。

山のふもとまでずっと広がる草原と、その上に広がる青い空。

地面すれすれを飛ぶ小鳥に、明日は雨かなあ、と思いながら、アーフィは腕を組んだ。

“ほんとうのこと”。

たとえば、あの小鳥。首をかたむけていなかったら、きっと見て

なかった。

見てなくても、鳥はきつと飛んでいたけれど。
見てたから、あの鳥のことを知ることができた。

あ。

・・・そつか。

アーフィは、なんとなく納得する。

草原から目をそらしていたら、あの小鳥のことを知らなかつたろう。

羽の白さも、くちばしの黄色さも、地面すれすれをとんだことも、
分からないままだった。

“ほんとうのこと”というものも、そんな風に簡単に分からなくなってしまうのかもしれない。

なんとなく、何かが腑に落ちた気分で、アーフィは首をまっすぐに戻した。

先生の、黒に近い銀色の眸まゆをじっと見つめる。

そういえば、大事な話をしたり約束をしたりするときは相手の目を見ること、というのが先生が最初の授業で教えてくれたことだった、となんとなく思い出す。

「眼をそらすことも、そらさないことも。アーフィの自由なんだけど」

視線をもどしたアーフィにやわらかな眼差しを注ぎながら、先生は言葉を続けた。

「けれどね、できるだけ」

穏やかに吹いた春風に、アーフィの青い髪が揺れた。

眼にかかった長い髪を手で払って、先生をまっすぐに見つめる。

アーフィよりずっと長いはずの黒に近い銀髪は、後ろで一つにまとめられているせいか、ちっとも乱れていなかった。

ちゃんと見ていなければ、いろんなものを見逃してしまう。

それは何だかもったいないなあ、とアーフィは思った。

「本当のことを見極められる人になって欲しい」

先生の言うことは、いつも簡単なようで難しい。

見極めるってどういう意味だろう、とアーフィは考えて。

考えたけれど、よく分からなかった。

だけど、今からいろんなものを、ちゃんと見てみよう、と思った。

1. はじまりの夜のはじまり

朝がくるには、ほど遠い時間のことだった。

喉のどの渇きに眼を覚ましたアーフィは、底まで干上がった水がめの前でため息をついた。

水がすぐに飲めないことではなく、水を絶やしてしまったことが悔しくて唇を噛む。

数えで五つになった一昨日おとといから、水くみはアーフィの仕事だった。

常に、アーフィの腰より少し上まで水をたたえておくのがその基本。

お母さんなら、こんな失敗はしないのに。

思うでもなくこぼれた眩くらきに、この三日間でしかした失敗の数々が脳裏から浮かび上がる。

それだけで沈みかけた気持ちきもちを首を何度か横に振ることで立て直して、アーフィはマントに手を伸ばした。

井戸まで一往復か二往復して、水をくんでくればいいだけのことだ、と自分に言い聞かせながら。

夜着よけの上からマントを羽織はもって、木桶きおけを持ちあげて。

ちよつと癖くせのある木の扉を、軋きしませないようにそつと押し開ける。扉の外は、この時期の夜にふさわしく、ひそやかな空気を纏まとっていた。

羊毛のマントの襟えりをくすぐる夜風に、アーフィは首をすくめる。何を思うわけでもなく見上げた夜空は、こころなしに常より星が

ざわめいているように見えた。

湧き上がってきた理由のない不安に、草や土や樹や羊の毛のおいを呼吸ごと吸い込んで、アーフィは一つ息をつく。

それから、木桶の持ち手をぎゅっと握って、月とおなじ明るさの道をあぶなげのない足取りで歩き出した。

村の中心にある井戸までは、幼いアーフィの足でも、そうかからない。

石造りの井戸は、昨日と同じ重厚さじゅうこうさでそこにあつた。

決められた場所に木桶を置いて、そつと魔法の言葉まほうの言葉を唱える。

教えてもらったばかりの、井戸から水を呼び出す呪まじないを。

一昨日と昨日のような失敗を重ねたくはなかった。

成功を祈りながら、じつと井戸を見つめる。

音も無く浮かび上がった水の球が静かに桶を満たすのを見届けて、アーフィは笑った。

はじめて、一度で成功したのだ。

誇らしさで胸がいっぱいだった。

「水をこぼさずに、持ってかえるまでがお仕事」

数日前に母に言われた警句をかみしめるように呟きながら、アーフィは桶を持ち上げる。

どんな重いものが入っていても、持ち運ぶ人がせいっぱい力を出せば持ち上げられるように魔法がかけられている桶を。

うんと軽くする魔法をかけないのは、どうして。

先生にたずねたのは、つい昨日のことだった。

そのほうが簡単な魔法だし、使う人だって楽なのに、と。

でもね、とふんわりと笑った先生の眸を思いだして、アーフィは木桶を持つ手に力をこめる。

「そうしたら、きっと勘違いしてしまうだろうから」

口にしてみた言葉は、やっぱりよく分からなかった。

先生が言うことは、最上級の謎かけのように難しいことがある。

どういう意味かたずねても、いつか分かる日までの宿題、と教えてもらえないのだ。

だからアーフィは、何度も思い返しては考えているのだけれど、ヒントすら見つけられずにいるのだった。

いつか、分かる日がくるのかな

アーフィは一人ごちて、それから木桶の持ち方を少し変えた。

腕がだるくなってきた。

このまま歩いていたら家にたどりつく前に桶ごとひっくり返ってしまいそうで、道端にしゃがみこむ。

闇に慣れた目にも、村の様子はあまり見えない。

夜なのだ。

日が沈んだ後まで起きている人は、この村にはいない。

当然、窓に灯りがともることもなく、月灯りの魔法もかろうじて道を照らしている程度だ。

早く家に戻って眠ってしまおう。

桶を抱えなおして、立ち上がるうとしたときだった。

村をかこむ柵の向こうに、きらきらと揺れる光が見えたのは。

夜は、村の外に出てはいけないよ

先生に諭されたのは数日前のことで、アーフィはその言葉をちゃんと覚えていた。

けれど、アーフィの村は、魔王と勇者が遠くで戦っていることすらお伽話としか思えないほど平穏だったのだ。

得体の知れない光に、恐怖を呼び起こされたりはしなかった。

ただ。

舞いおどるような光の動きに、きれいだなあ、とみとれて。

もっと近くで見たいなあ、と。

単純に、そう思った。

だからアーフィは、大急ぎで桶を家に運んで、中身を水がめに移して。

それから、村の入り口に向かう道へ駆けだしたのだった。

2・知らない人と知りあう

はやる心は、アーフィの足を速めこそすれ、ゆるめることはなかった。

駆けて駆けて駆けて、息が乱れきったところにようやくたどりついたのは、村から一レイルほどの距離にある草原^{くさはら}。

ヤギたちのエサにする草を刈りに、村の子ども全員で来たのはつい昨日のことなのに、はじめて見る場所のように感じる自分に動揺^{うごちゆい}して、アーフィは何度もまばたきをした。

雪のように細やかな光が、音もなく草原中を舞いおどる。

朝露^{あさつゆ}の雫^{しずく}に似たきらめきが幾重^{いくえ}にも宙に浮かぶその様は、星々がワルツを踊^{おど}っているかのよう。

この世のものとは思えない美しさに、アーフィは言葉を忘れて立ちつくした。

「そこにいるのは、ヒトの子か」

唐突に、聞き覚えのない声が響く。

アーフィは飛び上がるほど驚いた。

この草原の近くに、アーフィの村以外の集落はない。

その村だって、山賊^{さんぞく}や、魔物^{まもの}すら来ないほどには、辺鄙^{へんび}な場所にあるのだ。

昼ならまだしも夜に、知らない人がここにいるなんてありえない。

そんなことは、考えるまでもなく分かっている、こういうときは村の大人を呼びに走るべきなんじゃないかと心のどこかで思ったけ

れど、アーフィはそうしなかった。

声のしたほうを真っ直ぐ見つめて、笑いかける。

「わたし、アーフィっていうの」

何のためらいもなく。アーフィは名のった。

さっきの音が、とても優しい響きを帯びていたからだ。

「あなたは？」

空中を踊りつづける光たちのおかげで、眼を凝らさなくても声の主は見えた。

くるぶしまで包み込むような長さの、黒い襟つきマントを羽織った男の人。

いつか街で見かけた吟遊詩人のお姉さんよりも白い肌に、紅い唇が良く映えていて。

先生より長い、夜明け前の世界を閉じ込めてもそうはならないような漆黒の髪の毛がその背中を覆っている。

左耳に、風とともにゆれる銀色の耳飾りが見えて、アーフィは不思議に思った。

男性が装飾品をつけるような習慣は、アーフィの村にはないからだ。

「私は……」

呟くような声で、男性は言う。

村の先生の声のように低くて物静かで、先生よりずっととらえどころのない、流れる水のような声。

その声に少しきほれていたアーフィは、白い顔に浮かぶ笑みがなんだか哀しそうに見えて眉をひそめた。

無理やり笑ったって、いいことなんか一つも起きないのに。

「私は、ロイという名前だった」

ロイ。

年に何回か、街からくる行商人さんとおんなじ名前。

思い出したままに言ってみれば、ロイと名乗った男の人はまた笑った。

さつきより楽しそうな微笑ほほえみに、アーフィは少し嬉しくなった。

「ロイさんは、何してる人？ 魔法使いさん？」

問いかけたのは、きらきら揺れる光があんまりにもきれいだったからだ。

だからアーフィは、ちょっと好奇心が混じった口調でたずねて、そうして、傷ついたような顔になったロイに気づいてとまどった。

「・・・魔法使い、というわけではないのだけれど」

静かな声で、ロイは言った。

かすれたようなその声に、なんだか聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がして、アーフィは口を閉じる。

「・・・そう、だね。昔は、この場所で畑を耕たがやしていたよ」

昔、というのがいつのことなのか、アーフィにはよく分からなかった。

ここはずっと草原で、畑なんてなかったのだから。

「わたしが生まれる前のこと？」

「そうだ、とロイは頷く。

君が生まれる、ずっとずっと前のことだった、と。

その顔に浮かんでいたのは、大人が古いことを思い出すときのよ
うな、何かを懐かしむような表情だった。

「昔、この草原ひげんには村があつて。そこに、住んでいた」

ロイが言い終わるか終わらないかのうちに、草原はその姿を変えた。
まるで昼のように明るくなった視界に、見たことがない刺繡のさ
れた布で飾られた、質素せしよな木造りの家々が並ぶ。

あつという間に、石造りの井戸や家と家をつなぐ小道、そして談
笑する人々も現れた。

「すごい」

眼を見張ったアーフィは、すぐにどれもが透明なことに気づいた。
あちこちで笑う、栗色の髪の子どもたちも、村の慣なつわしなのか誰
もが両耳につけている銀色の耳飾りも、やっぱり透きとおっていて。
その向こうで草が揺れるのが見える。

「まほう？」

アーフィは、尊敬の眼でロイを見つめた。

年に一度、夏の祭りのときにやってくる魔法使いさんだって、こ
んな凄い光景を見せてくれたことはなかったからだ。

「・・・ああ。今夜かぎりの、魔法だよ」

3・その言葉の向こうがわ

「私の家はね、その小さな通りの先にあった」

静かな声とともに、幻が変化する。

つい先ほど現れたばかりの家と家の間に、土を踏み固めただけの透明な道が現れた。

道の先には、小さな家があり。

家のすぐ側の花壇かたんでは、見たこともない草が育てられていた。

「あの花壇は、私たちの自慢だった。曾祖父そそふちの・・・父の父の父の頃から集めた薬草を植えていたから」

「わたし、たち？」

笑うように眼を細めて、ロイが頷く。

「両親と、妹がいたんだ。ちょうど、君のような年頃の」

その言葉とともに、家が透けた。

櫛かじの木の扉の先は、土間の台所。

その向こうに、寝室が1つ。

暖炉だんろと机と椅子いすと、寝台べっだが、家具のすべてだった。

どれも、いくどとなく修繕しゅうせんされながら丁寧に使われているのが一目で分かる。

「父は、とても器用な人で。木を組み合わせて机や椅子を作るのが得意だった。あの机も、椅子も、寝台も、父が作ったものなんだ」

家の裏から、小刻みに何かを叩く音が響く。

音がついた幻なんて見たことがなかったアーフィは、眼をまん丸くしてそちらを眺めた。

透きとおった家の向こう側。

黒々としたあごひげをたくわえた、やっぱり透きとおった男の人が、身体の大きさからは想像もつかない丁寧さで金槌をふるっていた。

使いこまれた金槌が、木の釘をかるがると打ちつけて。そうして目の前で椅子が作り上げられていく様子は、アーフィを感嘆させた。

「すごい」

そうか、と誇らしげに笑って、ロイは続けた。

毎朝ひげを整えるのが日課の、優しく力持ちで、怒ると怖い父親の話を。

その口調に自分の父親のことを思い出して、アーフィはくすりと笑った。

金槌を持たせたら力加減に失敗して叩き壊してしまつくらい不器用なお父さんは、優しいけれど怒ると怖いところが、ロイのお父さんと似ている気がした。

「ロイさんは、お父さんが好きなのね」

虚をつかれた顔、というのはこういう顔なんだろうかとアーフィは思う。

隣の叔父さんがたまに使うその言い回しは、難しすぎてまだ意味があまり分からないのだけれど。

「……ああ、好きだったよ」

優しいまなざしを幻に向けながら、ロイは新たな話を始めた。料理と、刺繍を含めた裁縫全般が得意で、いつもほがらかに笑っていて、薬草を育てることにかけては村一番で、けれど何もないとこで毎日のように転んでいた母親の話。

視線の先では、栗色の髪の女性が忙しそうに立ち働いている。夕食なのだろう、なじみのある野菜が、暖炉の上で煮込まれていた。辺りにただよう香りに、口の中がたちまちつばでいっぱいになる。

「おいしそう」

「おいしかったよ、とてもね」

茶目ちぢめつ気のある笑顔で、ロイが言う。

「いいなあ。わたしのお母さんなんて、ニンジンを最後に入れたりするのよ」

生煮えのニンジンの硬さと苦さを思い出してしまって顔をしかめたアーフィは、だから気づかなかった。

一瞬、哀しそうな顔をしたロイに。

「今のうちに、たくさん習っておいで」

優しく紡つむがれた言葉の向こうがわに、深い何かを感じて。アーフィはロイをしっかりと見つめた。

確かに笑っているその顔が、どうしてだか泣いているように思えて、なんだか胸が重くなる。

「もちろんよ。だって、おいしいご飯が食べたいもの」

口を尖らせてみても、胸はちつとも軽くならなかった。

そんなアーフィの様子に気づいたのか、ロイが声をあげて笑う。

「違うない。妹もよくそう言つて、母に料理を習っていたよ」

促されるまま、透き通った家の中を見やれば、アーフィと同じくらしい背丈の女の子がお皿を運んでいるところだった。

「ああやつて、皿を洗つたり、運んだり、鍋をかきませたり・・・
味見をしているときが一番楽しそうにしていた」

幻の中では、女の子が味見をしている。

切れ長の栗色の瞳が、色は違うけれど、ロイにちよつと似ている気がした。

そのまま黙り込んでしまったロイを見上げて、アーフィはちよつと考える。

目の前に広がる幻と背の高いロイの顔を交互に見ているせいで、
なんだか首が痛くなりそうだった。

「座つて、お話ししませんか」

気づいたら、立ちっぱなしの足もちょっと疲れているような気がして、アーフィは言葉を続けた。

「ロイさんの背が高いから、首が疲れちゃった」

すまない、気づかなくて。とロイは笑つて、それから草原に腰を下ろした。

アーファイも続けて腰を下ろして、びっくりした。

夜露に濡れた草だらけの硬い地面の座りごこちが、町の教会の上
等な椅子よりもずっとよかったからだ。

これも、ロイの魔法なのかな、と思って。

アーファイは笑った。

「ありがとう、ロイさん」

4・つめたいぬくもり

ロイは、何も言わなかった。

アーフィも、それきり何も言わず、あらためて草原を見つめる。

いつの間にか、草原いつぱいに透明な村が広がっていた。

まるで100年も前からそこに在りつづけているようなたたずまいで。

里山さとやま近くの村だ。

みんなで畑を耕たがやして、村全体でヤギや羊や馬を飼って、獵師りょうしさんが狩りに行つて。

稀まれに、旅人さんが通りかかる。

そういった生活の片鱗へんりんが、幻に透ける。

そのさまは、どこかアーフィの暮らす村に似ていた。

花よりも、刺繡ししゅうをした布の方を好んで飾っていることや、誰もが銀色の耳飾りをつけていること、それから夕暮れとともに闇がおしよせること・・・、意図して観察しなくてもすぐに思い浮かぶ“違い”をのぞいても、だいぶ。

「.....?」

脳裏のうりをよぎった何かに、問いかけを含んだため息がこぼれる。

稲妻いなずまに照らされた夜の世界のような一瞬のひらめきは、けれど形にならずに消えた。

さほど気にとめずに、アーフィは幻に意識を戻す。それでなくても、五感に訴えかけるこの幻に、すっかり夢中だった。

この幻の前では、山一つ向こうの大きな町のお祭りの、何もないとところから色とりどりのお花が現れる魔法ですら、かすんでしまうだろう。だって、そんなことを考える瞬間にも、何十人も透きとおった人が村の中で動いているのだ。

幻の中の時間は、あっという間に過ぎた。

夜の帳がおりるとともに誰もが寝台で眠りについて、夜明けより少し前ごろには女の子たちが身体より少し小さいくらいの木桶を抱えながら村の井戸へと向かっていた。

どうやらこの村でも、水を汲むのは女の子の仕事のようでした。

彼女たちが口ずさむ唄の、不思議な旋律をなぞりながら、アーフィは笑った。

さっきまでまったく知らなかった村が、やはり近しく感じられた。

笑った顔のまま、なんとなく振り返ってみる。

予想よりずっと近くに、自分より大きな身体がうずくまっています。今までその近さを気取らせなかったほど薄い気配にびっくりしたけれど、夜をそのまま写しとったような漆黒の双眸がどこか途方に暮れているようにも見えて。

アーフィは、なんとなく伸ばした手で黒髪を梳かすように撫でた。お母さんが、水浴びのあとでしてくるような、そんな手つきで。

「……私が、恐くないのか？」

ぼつり、と。

穏やかな雨よりも静かな声が、アーフィの鼓膜を揺らした。

その声ににじんだ怯えに、アーフィは少し混乱する。

ロイを怖がるような理由も、ロイが自分を怖がる理由も、何一つ分からなくて。

先生なら、分かるのかなあ。

いつものようにアーフィは思う。

先生ならどうするか、と考えるのは、難しいことを尋ねられたときのくせのようなものだった。

先生なら、分かるのかも知れない。

心のどこかでそう思いながら、自分で考えなければならぬのだとアーフィは気づいていた。

だって、今この場所に先生はいない。

いるのは、5つになったばかりの、どうしようもなく子どもな自分と、おかしなことにその自分を怖がっている大人のロイさんだけなのだ。

だから。

アーフィは分からないことをそのまま問いかけてみることにした。

「どうして？ ロイさんは、悪い人じゃないでしょう？」

ロイは、何も言わなかった。

うつむいたその顔は、陰かげになって見えない。

のぞきこむかわりに、アーフィはロイの頭をそつと抱きしめた。

アーフィの小さな身体では、それが精一杯だった。

凍りついたかのように動きを止めてしまったロイに、どうしたら

いいのか考えあぐねて、アーフィは透き通った村になんともなく眼をやる。

草原の向こうの丘のそのまた向こうから顔をだしたのは、やはり透明な、満月。

それぞれの家に眼を向けてみれば、今日の仕事を終えて帰り着いた人々が、食卓を囲むさまが視えた。

誰もが穏やかに笑っていて、それになぜだかほっとする。

「ロイさんは、優しい人だと思う」

だって、こんなに素敵な魔法を紡げるんだもの。

はじかれたようにロイが顔を上げて、二人の視線が交わった。

ロイの視線の強さと自分が口にした言葉の両方に、アーフィは少しとまどう。

ひとつは、ひとつであってすべてにはなりえない。

ことあるごとに先生に言われて、わかっていたはずだった。

にもかかわらずこぼれていた言葉にうるたえながら、アーフィは腕からすりぬけていった頭に手をのばして、さっきまでそうしていたように撫でた。

「・・・やさしい、ヒトたちだったんだ」

静寂を破った声は、ひどく震えていた。

震える手が、そのてのひらの向きで大きな樹の隣に建てられた家を指し示す。

そうしてロイは、震える声で語りはじめた。
村に暮らす、すべての人のことを。

イノシシを捕まえるのが上手な、猟師りょうしのクーパーさん。
奥さんのミスリ・さんは皮をなめすのが上手で、町から来る行商人が感嘆するくらいだった。

その向かいの家に暮らしていたのが、村で一つきりの宿屋を兼ねた、酒屋のクルガンさん。

ガキに飲ませる酒はねえ！ が口癖くちくせで、悪戯いたずらをしては怒鳴どなられた。

その手前の村一番質素な家が、村長のヨーゼフさんの家。

ヨーゼフさんは、みんなと同じように朝早くから畑を耕していた。
誰よりも村のことを考えてて、村人一人ひとりのことをよく知っていた。

子ども心に、立派な人だと思っていた。

それから、村はずれにあるのが薬師くすりのラズさんの家。

薬の調合には静かな場所がいいから、とあの場所に住んでいた。
気のいい人で、怪我をした子どもはたいてい、ラズさんに治してもらっていた。

ロイの言葉とともに、食卓を囲んで談笑する人々がアーフィの前に現れては消えていった。

アーフィの村よりちよつと少ないけれど、それでも何十人もいる村人一人一人を鮮明せんめいに映し出す幻に、アーフィは感嘆した。
映し出された誰もが、楽しそうに嬉しそうに笑っていて。

けれど、それを映し出しているロイが、ちつとも笑っていないことにアーフィは気づいていた。

「この時間が、とても好きだった」

もう震えていない声で、静かに言葉を紡ぐロイの視線の先に、小さな家があった。

夕食を囲んで、ロイのお父さんと、お母さんと、妹と、それから、栗色くりいろの髪かみの少年が談笑していた。

「ロイさん？」

少し混乱して、アーフィはロイを見つめた。

ロイの黒い髪が風に揺れる。

幻の少年の栗色の髪は、揺れない。

「あれが、私だ。栗色の髪の・・・今よりずっと、幼くて何も知らない頃の」

淡々と、ロイは言った。

髪の色が違うのに「私だ」と言うロイに、アーフィはやっぱり混乱して。

けれど、ロイが自分だと言うのだから、そうなのだろう、と思った。

どうして、と声高に問うには、夜が静かすぎる。

「耳の飾り、みんなつけてるのね」

なでる手をそつとおろせば、ロイの左耳に触れた。

今は春なのに、ロイの左耳は冬の桶にはった氷よりも冷えきっていて、一瞬だけアーフィの手が震える。

耳飾りに触れるのはためらわれて、アーフィはロイの頬に触れた。

そこも凍てついたように冷たかった。

「……祈りだ。互いの幸せと命への感謝、それから……」

それ以上は言わずに、ロイはそっと顔を動かして、アーフィの手を遠ざける。

「冷たいだろう。これ以上、触れないほうがいい」

5・みる、みない、みる。

すべてを拒むこはような声に、アーフィはのぼしたまま宙をさまよっていた手を少しひっこめて、黒い服のすそをつかんだ。

「寒いのは、ロイさんのほうでしょう?」

さつきから、泣きそうなのも震えているのも、冷えきっているのもロイさんの方。

アーフィはそつと言って。

そしてすぐに後悔した。

ロイの顔がくしゃりと歪ゆがんで、楽しそうな夕食の光景もかき消えてしまったからだ。

「寒くはないよ。感覚なんて高尚ウチウチなものは、とつくに無くしてしまっただから」

静かにロイが言う頃には、透明な村はその姿を少し変えていた。

男の人たちに担がれて、小道を音もなく進む・・・白い布で覆われた棺かひこ。

その隣を泣きながら歩いている、どこか見覚えのあるあの女性は・

・・・ロイの、母親だった。

耳飾りが左耳に一つふえている。

その意味が、アーフィにはなんとなく分かった。

「眼をつむって、耳をふさいでおいで。視みていて気持ちのいいものはもう現れないから」

穏おだやかに吹く風の中、けれどその髪すら揺れない幻の葬列そうれつが進む。

村はずれの、白い花で囲まれた広場に、掘りかえされたばかりの深い穴があった。

男たちが穴の底に棺を横たえ、女たちが白い花をそな供え、子どもたちが何かの種をふりまく。

どつと老けこんだようにみえる村長さんが、しわだらけの右手で左耳の耳飾りを揺らし、左手に持っていた杖で大地を叩いて空をおいだ。

参列した人々が、左耳の耳飾りをゆらす。

女たちが口を開き、さざなみのような旋律が広場に満ちた。

くりかえし、くりかえし。

高く、低く。大きく、小さく。

同じ旋律が、違う言葉をのせて響きつづける中で、穴は土で埋められ。

掘り返した痕跡が残るその場所に、青い花が一輪植えられた。

ふと視やれば、同じ花が、広場のあちこちで風に揺れていた。

「・・・眼は、そらさないの」

呟くように言って、アーフィは死者の眠りの地を前にたたずむ、幼いロイを見つめた。

その後ろで、薬師のラズが、拳を握りしめてうなだれているのが眼に焼きつく。

同じしぐさを、アーフィは知っていた。

こ流行り病でヤギが次々と倒れて、水すら飲めなくなつて、次々と死んでしまったときに、村の皆や、先生や・・・もちろんアーフィ自身も、同じようにうなだれていた。

それは、たすけられなかった悔しさや、何もできなかった自分へ

の憤り^{いきどお}が、叫びだしたいくらいに、叫びだせないくらいに、身体の中で渦巻いているときの、しぐさだった。

「わたしの村ね、先生が1人いて。文字や、計算や、いろんなことを教えてくれるの」

言う間にも、幻の中の時間は動いていて。

参列の人々がそつと広場を後にする中で、透きとおったお母さんの腕が透きとおったロイを抱きしめる。

その服のすそを、透きとおった栗色の髪^{かみ}の少女が、ぎゅっと握っていた。

「……この間、先生が言った。

目の前にあるものから、眼をそらさない方がいい、って」

眼をそらしたら、本当が分からなくなるから。

覚えている言葉をそのまま紡^{つむ}いで、小さく息をつく。

言葉に込められたものの重みに、今さら気づいたような気がした。

「……ロイさんは、村の人が好きなのね」

泣き出して、そして皆をもつと悲しませるのは嫌だ、と。

そんな声が聞こえた気がして、アーフィは言った。

本当のところはよく分からなかったし、言葉にしてはいけないのかもしれないとも思ったけれど。

声は、真実そのもののように響いた。

「……みな。本当に、いいヒトたちだった」

ぼつり、と。
眩くようにロイが笑った。

幻が、その姿を変える。
花に囲まれた広場が視界を通りすぎ、木造の家々と畑が広がり。
そうしてそこに、ロイとその家族が視える。

冬が来て、春が来て、秋が来て。
畑を耕し、種をまき、世話をし、収穫しゅうかくをして。
そのどれもに、男手をなくした家族の世話をなにくれとなくやく
人々の姿があつた。

それからしばらくして。

今のアーフィより少し年上になったロイの妹が、家の仕事をなん
とかこなせるようになってから何度か季節がめぐるころに、今より
少し年若いロイが、旅支度をして村を出て行こうとしていた。

「>冬の間だけ、町に出稼ぎに行くことにしたんだ」

疲れはてたような声に、アーフィはロイを見つめた。
陰かげをおびたその横顔が、何か遠い存在のようにも見えて。
つかんでいた服のすそを、ギュッと握りなおす。

透明な村の向こうで、夜の闇が深まったような気がした。

「春になったら、かわいい飾り物をいくつか土産に、帰ってくるは
ずだった」

それつきりで、すうつと揺らぐ家々に、アーフィは気づいた。
この続きを見せたくないのだ、ということに。

「・・・口」

口に出しかけた言葉に、顔をゆがめる。

改めて考える必要もないほど、とんでもない我儘わがままだった。

見せたくない、と考えるものを、見せてといわれるのは自分だつて嫌なのに。

それでも、今知ろうとしなければ二度と知ることができないような切羽詰せっぱつまった感覚が、言葉を口から押し出した。

「何が、あつたの？」

まっすぐに、アーフィはロイに向きなおった。

自分よりずっと年上の男の人は、幻の中の幼さをにじませたまま、そこに座っていた。

「・・・私は。きっと、酷くずるいことをしているんだろうね」

どんな罪よりも、ずっと酷いことをしようとしているんだろう、とロイは呟いた。

アーフィは、その言葉の意味をとらえきれないまま、闇色ひどみの眸を見つめた。

「すべて。誰かに聞いて欲しかったのかも知れない。誰にも、知られたくなかったのかもしれない」

二つの視線が交わる。

何かを思い出せそうな気がして、けれど思い出せずに。

アーフィは、漆黒の双眸めくろを、眼をそらすことなく見返した。

「神さまは、いると思うかい？」

いつそ泣いたらいいのに、とアーフィは思った。
悲しいのか、怒っているのか、痛いのか、それらが全部混ざった
ようなロイの表情に。

「……………今さら。本当に、今さらな話だ。」

忘れてくれてかまわない。いつ耳を塞いでも、眼を閉じても。
その手を、離して。君の村に帰っても。それで、かまわない」

だから、話してもいいかな、とロイは言った。

アーフィの村のはずれに住むお爺さんが、古い悲しい話を聞かせ
てくれたときよりずっと、あきらめたような、すぎるような口調で。

服のすそをつかんでいた手を、アーフィはそつとはなした。

それから、膝を抱えてうづくまるような姿勢をとっている黒づく
めの身体の、左横にぴったりと座って、その身体に腕を回す。

黒い服ごしの抱擁^{ほうよう}は、肌に触れるのと変わらず、凍てつくような
感覚をアーフィに与えたけれど、はなれる気にはなれなかった。

「聞かせて。ロイさんのおはなし」

6 ・はなまのできごと

ためらうように、口を開いて、閉じて。
もう一度開いて。

ロイは、幻の中に積もる雪よりも白い右腕をすうつと伸ばした。

「町に出て。冬が、半分すぎたころだ。噂が、流れた」

指し示されたそこは、透明な町角。

一糸いっしみだ乱れずに、馬に乗った騎士きしさまが行進する。

透きとおった騎士さまの向こうに、青ざめたロイの姿が見えた。

「隣の国と、戦がはじまった、と」

「隣の国？」

問いかけるでもなく、アーフィは口の中で呟く。

村は、町にいらっしやる領主さまが治めていらっしやる。

そして、何人もいらっしやる領主さまを、王さまが治めていらっしやる。

ついこの間、学んだことだった。

「この村はね。運の悪いことに、隣の国との境界かきにあっただんだ」

学んだこととまったく違うロイの言葉に、アーフィは少し混乱する。

先生が見せてくれたこのあたりの地図によれば、この辺りには大

きな国が一つあるだけだ。

しいて隣の国を挙げるならば、山を4つと湖を3つ越えた向こう。

昔、ここに暮らしていた、とロイは言ったけれど、それは一体いつのことなのか。

歴史を学びはじめてまだ日の浅いアーフィには、おしはかることもできなかった。

少しの間、そうして考えていたアーフィが、“境界”という言葉の意味するところを理解して目を見張った頃には、幻の中では戦はじまっていた。

見知らぬ鎧を身につけた見知らぬ騎士さまが、あちこちから駆りあつめた人々を軍団にして、争いに馳せさんじてゆく。

ひるがえる旗印しほごしほの、アーフィには馴染みのない紋様もんようを、射るような眼でロイは見ていた。

「私は……、必死で駆けて。村に戻ったよ」

めまぐるしく流れていく戦場の光景に、アーフィはロイの背中とおなかに回した腕にぎゅっと力を込めた。

手をはなしたら、そのぬくもりの冷たささえどこかに行ってしまうような気がして、恐ろしくてならなかった。

「村に戻った時には……すべてが終わっていた」

呆然と、眼を見開いたままの……眼を閉じることすら忘れたアーフィの前に、あちこちから煙のたちのぼる村の姿があった。

透き通った石の壁の後ろ。あの小さな家があった場所に、ロイが崩れおちるように膝をついたのが見える。

「……本当に。眼をそらしてくれて、かまわないんだ」

震えているのはロイだと思っていたアーフィは、その言葉でようやく、しがみついた自分の身体こそが、酷く震えていることに気づいた。

だって、こんな光景は見たことがなかった。

無事な家は一つもなく。村はずれの広場を囲む花も、蹂躪しゅうりゃんされてその影もない。

村の人々があんなに丹精たんせいこめて育てていた畑のものは、乱暴に引き抜かれてもつていかれているか、それとも泥の海に埋まっている。あちこちから煙が立ち上っていて。その向こうに転がった……鎧姿の……泥と血で汚れた、あれは……。

「……村の人、わたし、好きだと思ったのに」

それだけしか言えずに、アーフィは幻を見つめた。

夜の中に浮かぶ透き通った昼の幻は、闇よりもずっと重くアーフィに圧おしかかった。

泣きだすことも出来ないほど重い光景から、眼をそらしていい、とロイは言うけれど。アーフィには、出来なかった。どれほどそうしたくても、どうしても、出来なかった。

「……戻ってきた時には、すべてが終っていた」

呟くように、ロイは言った。そうして、もう止めようとはせずに、続きを口にする。

「……誰も、生きて……いなかった。妹も……母もだ」

静かな静かな声は、泣き叫ぶよりずっと痛みを含んでいるような気がして、アーフィはロイの背中をゆっくりさすった。さすりながら、もっと自分の身体が大きければいいのに、と思う。そうしたら、お母さんがしてくれるみたいに、体全部を包み込んで抱きしめてあげられるのに。

「私は、泣いて。泣いたよ」

濁いた声で、ロイは続けた。

その視線の先、石の壁の向こうで、栗色の髪のロイさんが、妹の亡骸なきがらを抱きしめて慟哭どうくしている。

泣き叫ぶ声は、聞こえない。

ロイさんの思いやりだろうか、とアーフィは思った。

それとも、幻だから、聞こえないだけなのか。

「泣いて、泣いて、泣いて。泣き続けた」

目の前で、地面を叩くロイを、見ていることしかできないことが、どうしようもなく苦しかった。

そのときだった。

ロイのものであって、ロイのものではない声が、あたりに響いたのは。

『…んてっ』

血がにじむ拳を地面に叩きつける幻の中のロイを、痛々しさを覚えながらアーフィは見つめた。

『この子は、まだ十おとにもなっていないのに…』

ああ、これはロイさんの想いだ、とアーフィは気づく。

視界の端で青ざめた黒髪のロイの背中を、そっとさすった。

『なんで！　なんでだ！！』

みんな、みんなみんな！

普通に、普通に生きてただけなのに！！！！』

「聞かないでくれ」

重なる声に、アーフィは黒髪のロイを見つめた。

聞かせるつもりはなかったんだ、とロイは早口で言った。

声が、聞こえるはずはない、と続ける青ざめた唇に、背中をさすった手でそつと触れて、アーフィはその頭を撫なでた。

そうでもしなければ、これ以上この場にいることに耐えられそうもなかったのだ。

『小さな村だけ！』

飾り物もろくに買ってやれないけど！！

それでも！　それでもっ！！

みんなだ笑って、幸せになって、そうやって生きてくんじゃなかったのかよ！！！！』

「……聞かないで、くれ」

怒りと痛みと悲しみが入り混じった声に、懇願こんがんが重なる。

どちらも、同じくらい痛々しくて、アーフィはもう一度その頭を撫なでた。

耳を塞ぐ手は、もう残っていない。

『神さまー！』

なあ！ そうじゃないのか！？』

響く声に、アーフィは思った。

絶望という言葉の形にしたら、こんな声になるのかもしれない。

「耳飾りを、私の村では皆がつけていた。あれは、互いの幸せと、命への感謝と、それから・・・神さまへの祈りを、形にしたものだった」

静かに、ロイが言うのを、アーフィは黙ったまま聞いていた。

振り下ろした拳をそのままに、透き通ったロイが泣き叫ぶ姿が近い。

『んでッ！ 何で！！』

何で助けられなかったんだ！！！！』

「私は・・・泣いて、泣いて。それから、妹を、母を、村の人を助けてくれなかった神さまを怨んだ」

淡々と紡がれた言葉に、アーフィは愕然と眼を見開いた。

先生が一番はじめに教えてくれたことだ。

裏の家の、3歳のミーファだって知ってる。

それくらい、当たり前・・・、してはいけないことだ。

『……………しない』

目の前で、透きとおったロイの唇から、透きとおった血がこぼれる。

『信じない』

震えながら、アーフィは幻を視つづけた。

夜の中の夕暮れ。

透きとおった太陽が遠く沈みゆく逢魔おじまがとき時。

紅く染まった世界の中で、紅い血が、透きとおっても尚、紅く大地を染める。

『あなたなんか。ただ生きていた、優しい人たちを助けてくれないあなたなんか!』

その先の言葉を言ってはいけない、と叫ぼうとして、アーフィは気づく。

これはもう、終わってしまったことなのだ、と。

『あなたなんか! 滅べばいいんだ!!!』

それは、冒流くわつりゅうですよ

遠く。

お母さんの声が聞こえた気がして、アーフィは身体を震わせた。ぼつとく。まぎれもなく、それは冒流くわつりゅうだった。

「……逃げてくれて、かまわない。何もしないから」

何もかもをあきらめた声が、思わずしがみついていた腕のすぐそばで響く。

そらせない視線の先で、耳からひきちぎられた銀の飾りが、あっけなく地面に転がった。

透きとおった栗色の髪が、黒く染まっていくのも、見えた。
髪だけではなく、眼も、爪も、眉や肌の毛の一本一本まで、
漆黒しゅくくに変わる。

ああ、そうだ、とアーフィは今になって思い出した。

黒は。

純粹な、混じりけのない漆黒は。

罪の証だった、ということ。

7. とこしえではない永遠

幻の空気が一瞬で変わったことを、アーフィは感じとった。透明なのに、叩きつけられるような暴風が、辺り一帯に吹き荒れているのが分かる。

分かってしまった瞬間に、アーフィは泣き出していた。

ロイさんが、それまでのロイさんではなくなってしまったことが、哀しくてしかたがなかった。

「……気づいたときには、私の村は石積み一つ残さずに消えてしまっていた」

言葉とともに、そつと身体をはなそうとしたロイに、アーフィは強くしがみついた。

はなれてはいけないような気がした。

たとえ、その肌がどれだけ冷たくても。

その気配に、鳥肌がたっても。

「……気づいただろう？ 私は、君のような、ヒトではない」

自分をいじめるような口調に、アーフィは首を横に振ったけれど、ロイさんは止めなかった。

「……魔王が、もう500年も前からこの世界を襲おそっているのじやよ」

思い浮かべてしまった村長の言葉にも、アーフィは首を横に振りつづける。

「隣の国も、私の国も、同じように消えていた。だから、この辺りには・・・君が住むような、小さな村しかないんだ」

静かに言葉を続けるロイの眸ひとみをなんとか見つめて、アーフィは首を横に振る。

これ以上、聴きたくなかった。

「それから・・・、私はヒトに襲われた。私が滅ぼした国に住んでいたヒトの家族や、友人や、恋人や・・・そのすべてを、私は消してしまった」

魔に墮おちたばかりの身体で、強大な力を制御しきれなかったのだ、とロイさんは言い、それも言い訳にすぎないのだ、と自嘲じちやうした。

「もう、どうでもいいと思った。ヒトなど滅びてしまえ、と。そう考えて」

そうして、齒向かう者を消しつづけて。気づけば300年がすぎている

淡々と続けられた言葉を、どうしていいのか分からずにアーフィは聞いていた。

300年という途方もない時間に、その漆黒しっくの髪の意味に、つまかさねつづけられた行為に、かけられる言葉など何一つないような気がした。

「ある夜に。私はこの場所に立っていた」

風が、黒くて長いその髪を静かに揺らす。

夜の草原に、透明なもう一つの草原が重なる。
透き通った黒髪のロイが、そこにたたずんでいた。

「300年間、ずっと。訪れることを避けていたこの場所は、
瓦礫がれきの一つも残っていなかった」

何をするでもなく立ち尽くしたままの半透明なロイを、アーフィ
は見つめた。

眼をそらすことはしない、と言ったのは、そういえば自分だった、
と思ひ出す。

「何も、感じなかった。悲しみも、怒りも、怨みも、何も感じない
ことが哀しくて、恐ろしくて、苦しいはずなのに。それでも、私は
何も感じていなかった」

まるで懺悔ざんげのようだ、とアーフィは思った。

その瞬間、すべてが腑ふに落ちる。

酷くずるいことをしている、と言ったロイさんの顔がふつと脳裏のうり
に浮かんだ。

確かにそのとおりだった。

まぎれもなく、これは懺悔だった。

けれどここには、町の神父さまがいない。

本当は、神父さまに「赦すゆる」と言ってもらわなければ、懺悔は終
わらないのに。

その神父さまがいないのだ。

だからアーフィは、ロイにしがみついていた腕で、その身体を抱
きしめなおした。

そうすることしかできなかった。

「どんなに呪っても、世界は朝をむかえて。

どんなに力をふるっても、ヒトは私にかかわりのないところで生まれつづけた。

殺せば殺すほど、何かを奪えるような気がして・・・あてもなく殺しつづけていたけれど。

手に入ったものなど何一つなかった。

・・・もうね、何もかもがどうでもよくなっていたんだ」

震えているのは、自分なのかロイさんなのか、アーフィには分からなかった。

涙でにじんだ視界の中、透きとおったロイが膝をつく。

その手に、夜の闇が集まって、剣が生まれるのが見えた。

「何も感じないのなら、消えてしまえばいいと思った」

淡々と語られたその瞬間に、透明な漆黒しじくの剣が透明なロイの首を貫いた。

けれど、何もおきなかった。

「・・・消えることすらできなかった。私の力は、私にだけ、通じなかった」

ロイの身体に、剣がとけこんで消えていくのを、アーフィは見つめた。

がくり、と。

膝をつく音が聞こえた気がした。

叩きつけられた手に、力はなく。

透きとおった頬ほに涙はなく。

けれど、総毛立そうけだつほどの慟哭なういくを、アーフィは感じた。

「たたきつけた手に、痛みが走った」

痛み、なんて。

まだ感じられるのかと驚いた、とロイが言う。

その視線の先では、透明なロイが、手に食い込んだ銀を食い入るように見つめていた。

「まぎれもなく、妹の耳飾りだった」

淡々と、本当に淡々と語られる過去は、本当がどこにあるのか、その口調からは分からなかったけれど。

それでも、視界に映るロイの姿は、事実をアーフィに教えてくれた。

ロイの手に刺さったそれは、耳にあけた小さな穴に針のように細い輪を通すことで耳を飾る、女物の耳飾りだった。手に刺さったのは、その細い細い輪の一部。

小さなそれが、風化せずに残っていたことも、この場所にあり続けたことも、その瞬間に手に刺さったことも、奇跡としか言いようがないことだった。

「300年もかけて、私は、自分がかつてヒトだったことを思い出したんだ」

透きとおったロイの両手が、耳飾りをそつと握る。

祈るように、口付けて。

そして、穴のない左耳に無理矢理それを飾った。

「もう、このときには痛みをなくしていたけれど。前のように・・・」

何も感じずに力を振るうことはできなくなっていた」

耳からしたたった血は確かに紅かったのに、ロイは人ではない。
アーファイには、信じられなかった。

何をもって人を人とするのだろうか。

と、アーファイは思い。

その左耳に一つだけ揺れる銀色の耳飾りに、切なさを覚えてますます泣いた。

「だから、北の。人里離れた場所に、流れて・・・そこでずっと過ごしてきたんだ」

アーファイの眸まなこから、ポロポロと涙が落ちる。

ヒトを殺す、とロイは言った。

ずっと、そうしていたのだ、と。

ヤギを、食べるために殺したことが、アーファイにはある。

可愛がっていたヤギを、お母さんとお父さんと一緒に、足を押さえて殺して、血を抜いて、皮を剥はいで、肉を削そいだ。

そうして作った料理は、美味おいしいしくて、ヤギに感謝しながら大事に食べたけれど。

ヤギの鳴き声と、暴れる足を全身で押さえていた感覚は、何匹殺してもすべて忘れられない。

ヒトを殺すのは、それとは次元が違うのかも知れない。

それでも、ずっとひどい気分がするんじゃないだろうか、とアーファイは思っただ。

それすら感じないと言ったロイさんを、哀しく思った。

腕の中の、冷たいこの存在が、かなしくてかなしくてならなかつ

た。

だからといって、ロイさんは悪くない、と言うことは・・・ロイがしたことを罪だと言わないことは、アーフィにはできなかった。その二つは、まったく別の問題だった。

たとえばお父さんが殺されたら。

自分はきつと相手を怨むだろう。

お母さんが、なんて。考えたくもない。

それくらい、知ってる人が殺されるのは、嫌だ。

・・・死んでしまうのは、嫌だ。

それでも人は必ず死んでいくんだよ。

そう教えてくれたのは、先生だった。

だから、大切なんだと先生は言った。

命は永久とこしえではないから、愛しくて、永遠なんだ、と。やはり、謎かけのような言葉とともに。

命はとても大切に

互いに、いつくしむべきもの。

どうしようもないほど本当のことを思い出して、アーフィはうつむく。

ロイさんのすべてが罪だとは、アーフィには思えなかった。

思えないけれど、すべてが罪でないと言うこともできなかった。

ただ。

このままだと、どうにもしがたい真つ黒なものにロイが縛りつけ

られてしまう気がして。

アーフィは心の底から。

ロイに、笑って欲しいと思った。

自分をいじめるような笑顔でも、創ったような綺麗な笑顔でもなく。

ただ、笑って欲しいと思った。

8・あたりまえのことを、ひとつ

アーフィは泣きじゃくっていた。

震える腕で、ロイを強く強く抱きしめて、泣きじゃくることしかできなかった。

ちっぽけな腕の長さは、ロイさんの身体ひとまわり分もなくて、それがなんだか悲しくて、さびしかった。

ロイはもう、アーフィをひきはがそうとはしなかった。

だから、アーフィはしばらくそのまま泣いていた。

言葉にするべきことが、いくつもあるような気がしたけれど、何一つ言葉にできなかった。

「君が、そうやって泣くようなことは、なにもなかったのに」

ロイさんが一度も泣かないからだ、とアーフィは思った。

同時に、彼はもう泣けないのだ、と直感に知らされて。

また涙が止まらなくなった。

「・・・ロイさん」

むせび泣きながら、右手でロイの頬に触れる。

血が流れているとも思えないほどの冷たさに、ヒトではないのだ、と感覚が断じる。

けれどどうしても、ヒトではないと思いきれなかった。

迷いを抱えたままのアーフィの頭に、冷たさに少しずつ感覚を喪つていく手のことが思い浮かぶ。

しもやけになってしまってもかまわない、と思った。

あのかゆさも、痛みも。

今はどうでもいい気がした。

一つ息を吐いてみれば、そんなことを今思った自分が馬鹿らしくて、アーフィは少しだけ笑った。

泣きながら笑って、ふつとロイの黒い眼を見つめた。

お母さんが、真面目な話をしようとするときにそうするように。

「わたしは。ロイさんと出会えて、よかったと思う」

自然と、言葉が口をついて出た。

声になったそれは、当たり前前の響きで闇にとけた。

アーフィはまた一つ、息を吐いて、吸った。

簡単なことだった。

言えることは、言いたいことは、いくらでもあった。

口をついたことは、そのはじまりでしかない。

ロイさんがここににいることではなく、生きてきたことにもなく。

出会えたこと、という言葉を選んだ自分に、アーフィは笑った。笑いながら、言葉が続ける。

「ロイさんのことも、ロイさんのお父さんやお母さんや妹さんや、それから獵師のクーパーさんやクーパーさんの奥さんや酒屋のクルガンさんや・・・たくさんの人のことを知ることができたから」

ありがとう、とアーフィは言う。

まだ少しにじむ視界の中で、ロイは真っ黒な眼を見開いて、なんだかよく分からない顔で笑った。

その笑顔に、アーフィの胸がじわりと熱くなる。

自分をいじめるような笑顔でも、創ったような笑顔でもない、ただの笑顔。

それが、とても嬉しくてならなかった。

「……あり、がとう」

かすれた声とともに、自分の身体が宙に浮かんだような気がして、アーフィは眼を丸くした。

もっともそれは気のせい、実際はロイに抱きしめられていたのだった。

兄が、妹にするような、親が子どもにするような、穏やかで強くも弱くもない抱きしめ方で。

白い肌は、やっぱり冷たかったけれど。

その腕の中は、なぜだかとても暖かい気がして。

アーフィは力をぬいて、身体をぜんぶ、ロイに預けた。

すべての気力を使い果たしたような、何か暖かいもので満たされているような、不思議な気分だった。

ロイの腕の中で。

何かが伝わっているといい、とアーフィは願った。

もっと背が高ければ、もっと手が長ければ、しっかりと抱きしめてあげられるのに、とどこかしく思いながら、ロイさんが笑っていただけるように、と強く願いつづけていた。

そうして、どれだけかよく分からない時間を、アーフィはロイに抱きしめられて過ごした。

闇が一番深くなる頃に、そっと腕をとかれて、地面に足をつける。こんな時間にあるはずのない、暖かい空気に包まれて笑った。

自分のまわりのほんわかした空気が、ロイの魔法だということが

分からないはずもなかった。

感謝の思いをこめて、白いてのひらにそつと触れる。

冷たい手は、アーフィの熱でちよつとだけ温かくなって、それが少し嬉しかった。

8” カケガエノナイモノヲ、ヒトツ (side Roi)

泣きじゃくるヒトの子を、ロイは突きはなすでもなく、抱きしめかえすでもなく見つめていた。

しがみつかれた胸が苦しいのは、圧迫されているせいなのか、それとも別の何かなのか。

呼吸の必要のない身体が息苦しさを感じる矛盾に思い至るその間にも、ヒトの子の体温ごしに流れ込んでくる感情の深さが、いつそ心地よくロイに響く。

その心地よささえ借りモノでしかないことが分かっていてなお、愉快さがロイを包んだ。

・・・その愉快さも、北の城の魔王の感覚が投影されたにすぎないのだが。

ロイは、感情をもたない。

ロイは、感覚をもたない。

ロイは、ヒトではない。

ロイは、魔物ではない。

といって、魔王でもない。

正確なところを述べるなら、ロイは魔王の記憶の一部だった。

ヒトから遠くはなれ、ヒトの感覚をなくした魔王が、耳飾りを媒介に記憶から創りあげた仮初かりそめの人形。

その身は、実体であって実体ではなく。

その心は、もとより存在しない。

魔王の記憶と魔力の固まりにすぎない、不安定なモノ。

「君が、そうやって泣くようなことは、なにもなかったのに」

勝手に口からこぼれた言葉に、ロイは眉をひそめた。
機能上の問題はない。

ロイの身体は常に、相手の表層意識から言語化された情報を読みとりつつける。

心を読む、というよりはその語彙ごいを利用した翻訳というほうがより近い。

意図するものは、目の前のヒトの子の語彙の中で翻訳され、言葉として世界に踊りでる。

その機能は、相手が使う言語の稀少さや難解さに関わりなく発揮される。

神殿に仕える高位の者のみが契約を結んでようやく使うことが赦される神聖語でさえ、ロイの前では暗号にもならないのだ。ましてや、目の前の少女が使う言葉など問題になるはずがなかった。

問題は、イタワリだとかコウカイだとかいうものがそこににじんでいたことだった。

自分に存在するはずのないものが、当たり前のように口をついて出る。

それが、ロイを当惑させ、北の城の魔王を悦よろこばせた。
持ちえないはずの感情が、ロイの中でうずまいていることが。

「……ロイさん」

呼ばれた名が、思考の海からロイを引き戻した。

頬に触れる小さな手のぬくもりに、息を一つ吐く。

無意味でありながら、ロイと呼ばれる以上はごく自然な行為だった。

アーフィが、ロイをロイとして……ヒトの名によって定義した

瞬間から、ロイはその言霊に縛られ、魔王の一部ではなく魔法が使えるだけの人間ヒトとしてこの場に存在している。

だからこそ、本来ならば干渉しえない深層を・・・少女の感情を応用して、自らの心を“感じて”さえいるのだった。

目の前の少女の頬を、音もなく涙が伝う。

ヒトとしての心が、こぼれる塩水をぬぐってやりたいと思った。

昔、妹にそうしていたように。

そうすればこのヒトの子は・・・アーフィは笑うだろうか。

思った瞬間、不意にアーフィがふきだした。

泣きながら笑うその表情は、北の城に転がっている数々の宝石よりよほど美しく、気づけば見入っていた。

ヒトは、なぜこんなにも美しいのだろうか。

その理由は分からなかった。

分からないまま、ただアーフィに見入っていたロイは、何一つ見逃さないような真摯しんじさで見つめてくる青い眸ひとみに、少しうるたえ。

うるたえたという事実を、北の城の魔王が嗤わらった。

魔王にとっては、ロイの存在など単なる暇潰しにすぎなかったのだ。

これほど奇妙な結果を生むとは、考えもしないほどの。

「わたしは。ロイさんと出会えて、よかったと思う」

唐突な言葉に、眼が丸くなるのをとめられなかった。

今、アーフィは何と言ったのだろう。

反芻はんすうしても、言葉の意味は変わらずにそこに在り。

疑うことのできない耳を、ロイは何度も問いただした。

“よかった”、などと。

魔王^{ロイ}に出会えてよかった、などと。

そんなことを正気で述べるアーフィの本意が分からなかった。

たった今、目の前で繰り広げられた殺戮^{さつりく}の幻にあれほど怯えていた彼女が、そんな答えにたどりつく理由は何一つない。

相容れないものである魔王^{ロイ}を、ヒトの子が肯定するなど、あるはずがないことだった。

分からない。

その感覚にまた、北の城の魔王^{わら}が嗤った。

何百年ぶりかの鮮明な感覚が、ロイを満たしている。

勇者と対峙^{たいじ}するよりも、強い魔力をとりこむよりも、深く豊かにその鮮明さが、快かった。

魔力のつながりをたどって、魔王はロイの行動や感覚を把握している。

ロイの目の前にいるのは、ある程度の魔力を持つてはいるものの、それを使いこなす技術をもたない単なるヒトの子だった。

これが、たとえば成人をむかえたヒトであれば、ロイと眼^{まなこ}が合った瞬間にでも・・・それどころか同じ場で息をただけでも、狂戦^{バーサー}士^{カイ}と成り果てていてもなんら不思議はない。

魔王が北へ去ったのは、ヒトが刃を持って迫ってくるからではなかった。

魔王の存在そのものが、ヒトを刃に向かわせるがために、魔王はヒトの地を離れたのだ。

そして、今をして尚、北の城に籠っている。

幼き子なればこそ、一部とはいえ、“魔王^{ロイ}”に接してなお、正気を保っていられるのだ。

健やかなその精神に隙はなく、魅惑の技も通じなければ傀儡^{かいらい}にす

ることできない。

なればこそ、北の城の魔王はこの邂逅かいこうを少なからず悦よろこんでいた。はじめは単なる暇潰しとして、今はもう少し深い興味の対象として。

ヒトと魔王は相容れないもの。

それは絶対の理しんり。

にもかかわらず、このヒトの子は、見えるはずのない幻を見、聴こえるはずのない声を聴き、その上で“魔王ロイ”に寄り添っている。

その稀有さに、北の城の魔王はもう一度嗤わらった。

「出会えて、よかった」

ロイの戸惑いをよそに、アーフィは視線を合わせたまま繰り返した。

その笑みの美しさに、ロイは見入り。

その言葉の深さに、戸惑いをますます深める。

「だって。ロイさんのことも、ロイさんのお父さんやお母さんや妹さんや、それから猟師のクーパーさんやクーパーさんの奥さんや酒屋のクルガンさんや・・・たくさんの人のことを知ることができたから」

ありがとう、とアーフィは言う。

その笑顔に、ロイはすべての思考を忘れた。

感謝の言葉を受け取る資格など、持っていないはずだ。

借りモノの心が、うめくように叫ぶ。

その通りだ、とロイは思った。

思う間にも、アンドのようなコウカイのような何か胸を抉り、流れるはずのない涙が頬を伝ったような気がした。

記憶による錯覚に過ぎない、と北の城の魔王が嗤う。

それでも。

戯れに思い返してみればそれは、500年ぶりの涙だった。

アーフィの青い眸ひとみに映った自分の顔に、ロイは一つ息をついた。

意図しても創ることができないような、笑顔とも泣き顔ともつかない表情。

はるか昔に喪ってしまった心が今ここにあるならば、自分は何を感じるのでろうか、と埒もないことを思う。

その間にも、借りモノの心から広がる、叫びだしたいような泣き出したいような笑いだしたいような衝動に支配された身体が、勝手に口を動かした。

「……あり、がとう」

ぎこちない声だった。

そんな声を出したことは、この500年間一度もない。

北の城の魔王が、愉快そうに嗤う。

借りモノの心が、奥底から満たされている。

どれが本当なのか、ロイにはよく分からなかった。

それでも。

それでいいと思えて。

気づけばアーフィを抱きしめていた。

はるか昔、まだヒトであったころ、妹にそうしたように。

母親に、そうされたように。

そうしてみても、不思議な感覚にロイは気づく。

じんわりと肌に広がるそれが、温かいという言葉で表せることを思い出して、ロイは笑った。

最後の最後に、ヒトの温もりを感じられる。

はかったような幸運に、笑わずにはいられなかった。

そうして、しばらく抱きしめつづけて。

その温もりを、ひどく畏れる心に、ロイは気づく。

指先一本動かすことなく腕の中の温もりを消し去ることができただろう自分が、忌々しくも醜いものに思えてしかたがなかった。

ヒトとしての心がある、ということとは、こんなにも厄介なことだったろうか。

探ってみた、まだヒトであったころの記憶は、感覚を喪っていた時間の長さに霞んでしまっていて、答えの欠片も見つかりそうにない。

ただ。

疑うこともなくすべてを預けてくるヒトの子の重さに、眩暈めまいがした。

ああ、そうだとロイは思った。

いのちは、こんなにもおそろしく、もろく、けれどあたたかく、いとおしくて、かけがえのないものだった。

それは、やはりヒトの子の定義であって、自分のものではなかったが。

そんなことはどうでもよかった。

これほどまでに、ヒトらしい心を、もう一度感じられることだけで、十分だった。

仮初の身体に、借りモノの心。

これほどふさわしい組み合わせは他になかるう。

北の城の魔王が愉悦を隠すことなく嗤うのを感じながら、ロイはアーフィを強く抱きしめた。

しばらくのあいだ、そうして座り込んで。

闇が一番深くなる頃に、ロイは顔を上げた。

抱きしめていたアーフィの身体をそつとはなす

ヒトであったころの記憶が、切りつけるような風の冷たさをロイに思い起こさせた。

アーフィは凍えているだろう、とようやく気づいて、聞こえないように呪を唱える。

温かい空気だけが、その身体のまわりにひきよせられるように。そうしておいてから、ロイは空をあおいだ。

星がよぎる空の色は、何よりも深い藍色。

幻の向こうがわに揺らぐ草の、光に照らされずともなお濃い緑が、鮮明に眸に焼きつく。

夜明け前の世界は、深い色をたたえてそこに在った。

これほど鮮明に何かを見るのは、はじめてのような気がした。

ためらうようにそつと手に触れる幼い温もりに名残惜しさを感じ。

ロイは、ただ笑った。

幻のかききえた草原を、夜明け前の風がわたる。

かすかな音とともに揺れる大気にくすぐったさを覚えて、アーフィは笑った。

頬をなでる風は、この時間特有の身を切るような冷たさを忘れ、ただただ暖かく優しくかった。

隣にたたずむロイをまねて、空をあおぐ。

星が輝きを忘れ、闇が一段と深まっているのが一目で分かる。

陽が、昇ろうとしているのだった。

つい先ほどまでとは色を変えつつある空を眺めながら、時間の流れの速さにアーフィは顔を歪める。

朝が来たら、ロイさんはどこかへ行ってしまうのだ、という確信が、アーフィにはあった。

それも、もう二度と会えないどこかへ。

ふれていただけの手のひらで、白い指をにぎる。

サヨウナラまでの時間を少しでも引き延ばしたくて。

そのときだった。

再び、透明な村が草原にあらわれたのは。

「ロイさん？」

問いかけたアーフィに向かって、ロイは笑った。

その笑顔の温かさに、アーフィは言葉を忘れる。

とても、きれいだと思った。

「これが・・・私の、村だ」

誇らしげに、けれど何かを悼むような声音で、ロイが言う。

その言葉が届く頃にはもう、幻は草原いっぱいに広がっていた。

「、という名なんだ」

今まで一度も耳にしたことのないような、まるで妖精の歌のような繊細さを帯びた響きに、アーフィは息をのんだ。

「」

今まで知らなかった言葉で繰り返される名前が、乾いた砂にしみこむ水のような素直さをもって自分にとけこんでくるを感じる。

「？」

口を開けば、それが当たり前のように言葉があふれた。

一度も発音したことのない音で、どこからどんなふうに出したのかよくわからない声で、知らない意味の言葉が、よく知っているものを思いだしたときのよう^にに懐かしく響く。

戸惑いを覚えてロイをじっと見つめたアーフィは、その眸^{まゆ}の優しさに泣きたくなった。

「・・・よければ、覚えておいてくれないか」

切ないほどの祈りを含んだ声に言われて、アーフィはうなずく。問われるまでもなく、きっと自分は忘れないだろうと思った。

何を忘れても、これだけはずっと。覚えていたと思った。

10・夜明け前

それから二人は、並んで腰をおろして手を繋いだまま、透明な村を見ていた。

朝早くから起きだして畑の様子を見に行く村長のヨーゼフさん。森からキノコでいっぱいになったかごを抱えて戻ってくる、モリスさんとレインさん。

転んでしまった南の家のフィン君が、ラズさんに薬を塗ってもらっている向こうでは、ウサギを担いだクーパーさんが、ロイさんのお父さんと話していた。

それから、ミスリーさんと行商人さんの商談がまとまって。

ゆっくりと、けれど確実に、村の時間は流れていた。

朝が来て、昼が来て、夜が来て、また朝が来て。

それは、はるか昔に流れ去ってしまった時間だった。

もう二度と触れることのできない、はるか時のかなたの出来事。

「きれいだね」

アーフィは、ロイの冷たい手のひらをぎゅうつと握って、言った。

幻の中の人々は、誰もが優しく、毎日を大切に生きていて……だからこそ美しい。

その美しさを、言葉にすることなどできないけれど。

せめて、きれいだと思ったことを伝えられたらいい、とアーフィは思った。

「私が、こわくないのか」

静かな問いかけに、こわくない、と即答することはもうできなかった。

目の前にいるのは、その気になれば自分を指一本動かさずに殺すこともできる存在だと知ってしまったている。

「こわいわ」

アーフィは、ロイの眼を真っ直ぐに見つめた。

目の前にいるのは、自分を簡単に殺してしまえるけれど、それをしようとしていない存在なのだ。

「ロイさんが、いなくなるのがこわい」

つめていた息を、ほうつと吐き出すようなしぐさが、人よりも人らしく見えて、アーフィは笑いを重ねた。祈りたいような、泣きたいような気分だった。

「・・・私も、君がいなくなるのは、こわいよ」

ロイの奇妙な笑顔に、泣きたい衝動がこみあげてくる。何のための涙だろう、と少し考えて。

アーフィは、そうだ、わたしはかなしいんだと思った。思いながら、ロイをぎゅっと抱きしめた。

だって、きつと。

ロイさんはずっと独りだ。

どんなに強大な力があっても。

どんなに美しい幻を創りだせても。

11・はじまりの夜のおわり

段々としらんでゆく東の空が、近づいてくる朝の息吹を二人に伝える。

幻の輪郭はすこしずつ薄れ、草原が、本来の色を取りもどしつつあった。

「・・・行かなければ」

名残を惜しむようにゆっくりと、ロイが呟く。

「夜は終わる」

その言葉に、アーフィはのろのろと顔を上げた。

「おかえりなさい、君の世界へ」

その言葉にこめられた意思に、唇を噛んでなんとか笑う。

視界の外れに、透明な村が草原の果てのほうから揺らいで消えていくのが映った。

夜は・・・闇の時間は、終わったのだ。

「ヒトは、ヒトである方がいい」

呟くように、ロイが言った。

その重さを、アーフィは量れなかった。

量ることなどできない、と思いながら、長い黒髪をかきあげて、左耳へと動く白い手を見ていた。

「これはもう、置いてゆく。私がついていても仕方がないものだ」

その手が触れるか触れないか。

それだけで、耳飾りはあっけなく、白い耳からはなれた。

手のひらに乗せた銀色の小さな耳飾りに、いとおしむように口づけて、ロイはそれを高く投げた。

一瞬だった。

朝日に煌いた銀色は、一呼吸もしないうちに、砂よりも細かくなって、風に乗って消えていった。

「ロイさんは、どうするの？」

なんだか、ひどくおそろしい予感がして、アーフィは眉をひそめてロイを見やった。

こんな時に、なんでそんなにきれいな笑顔なのだろう。

「私は、魔だ。行くべきところがある」

かなしい、とアーフィは思った。

こんなきれいな笑みを浮かべて。

そうして、何をするつもりなのか。

それが、なんとなく分かるような気がして。

止められない無力さが、かなしくてならなかった。

「いきなさい、アーフィ。朝だ」

幻はもう、そのカケラたりとも残っていなかった。

遠い山の向こうからさしこむ朝日に白々と照らされた草原のなかで、ロイはゆっくりと立ちあがり、そうしてアーフィを立たせて、その背を押した。

「ロイさん」

名前を呼んで、遠くなった双眸をじっと見つめる。
ずるいなあ、とアーフィは思った。
こんな時にはじめて名前を呼ぶなんて。

「わたし、あなたの笑顔、好きだわ」

意趣返しも含めて、ぎゅうつと抱きついてすぐにはなれた。
驚いたような顔のロイに、くすくす笑う。

魔だ、とロイさんは言うけれど。

それでも、今ここにいるロイさんは、優しくて、かなしい存在で。
だから笑って欲しいとしか思えない。

「またね」

自分はきつと、後でひどく泣くだろう、とアーフィは思った。

お母さんに怒られたときよりも、ヤギを殺した時よりも、ずっと
ずっと泣くだろう。

それでも、今は笑っていたくて、だからロイのびっくりしたような顔を少しだけ見つめて、それから村に向かってかけだした。
振り返ったら、泣いてしまうような気がした。

太陽はもう、その姿を山の端からのぞかせている。
村が動き出す時間だった。

パン焼きのミレーさんは、もうそろそろ竈の準備をしているはずだ。

お父さんとお母さんが起きだす前に戻らなければ。だって、水汲みが途中だ。

考えながら、アーフィは走って。

息が切れて立ち止まる。

振り向けば、そこには広々としたいつもの草原があるだけだった。何も、特別なことはなかったような顔で。

「・・・・・・・・」

立ちすくむアーフィのそばを、風が駆け抜けてゆく。

さようなら、アーフィ。

どうか、幸せに。

耳元で響いたのは、まぎれもなく。

ロイの声だった。

X・それから

空に雲ひとつなく、風が心地よく世界をたゆたうある日のことだった。

いつものように水をくみに出たアーフィは、村の外から走ってくる馬に伝令使が乗っていることに気づいてびっくりした。

辺鄙なこの村に、伝令使が来ることは滅多にないのだ。

新しい、とても重要な法律が発表されたときか、とても大きな祭りの先触れか。

どちらだろう、と目を凝らす。

風にひるがえる伝令使の旗は、青。

祝いを告げる色だ。

何があったのだろう、と思いながら、けれどいつものように水をくんで家に戻った。

だって、それがアーフィの仕事なのだ。

その夜だった。

あさってから一週間の祭りがはじまることをアーフィが聞いたのは。

それはとても急な話で、準備が間に合うだろうか、とアーフィでさえ心配したけれど。

王の名の下に上等な酒とパンが全ての村にふるまわれる、と伝令使がみんなに伝えたことを知って、ほっと胸をなでおろした。

その日から、村中総出で祭りの準備におおわらわになった。

男の人たちは狩に出て大きなイノシシを捕まえるので忙しかった

し、女の人たちは村の広場を飾ったり、パン以外のごちそうを作ったりするので忙しかった。

アーフィを含めた子どもたちも、いつもの仕事に加えて野草を積みにつたりイノシシを捌くのを手伝ったりヤギの乳を搾しぼったりでやっぱり忙しかったのだ。

だから、アーフィが祭りの理由を知ることができたのは、伝令使でんれいしが到着して4日後、つまり祭りの当日になってしまったのだった。

「偉大なる勇者アーク、大魔法使いゲイル、精霊の使者リーン、剣士ノアールの手によって、忌まわしきかの魔王が封じられた」

村長さんの声が、村の広場に朗々と響く。

辺鄙へんびなこの村にはあまりかわりがない話だった。

それでも噂にきこえたあの魔王が封印された、ということを目に、村の人々の多くは純粋に祭りを楽しんでいた。

かなしいな、とアーフィーは思った。

本当なら一生食べる機会がないような上等なパンも、ぶどう酒も、ちっとも美味しいと感じられなかった。

伝令使でんれいしが、村人にせがまれるままに何度も何度も語った話どおりならば。

嗤わらいながら、魔王は封印されたのだという。

悪夢のような姿で、勇者をギリギリまで追い詰めて。

けれど、銀を媒介にした魔法には勝てなかったのだ、と。

何が本当なのか、アーフィーにはよく分からなかった。だって、魔王が封印される場面を見ていないのだから。

ただ、なんとなく。

あの朝に聞いたロイの音が、もう一度聞こえた気がして。
アーフィは、泣きながら笑った。

「ああ、お嬢さん。やはり嬉しいことだね！　もう魔王に苦しめられることはないんだよー！」

酔っているのだろう伝令使でんれいしが笑いながら言った言葉も、どこか遠く聞こえて。

アーフィはもう少しだけ笑って見せた。

視界の端に、村長さんと談笑している先生の姿が映って。
ゆるみそうになった涙腺を、目をつぶることでごまかす。
嬉しい、と誰もが言う場に、涙を見せてはいけないのだ。
だから、アーフィは。

手渡されたぶどう酒の杯を笑いながら飲み干して、心の中で呟いた。

先生。

魔王なんて、どこにもいなかったんです。

それが、アーフィの見た本当だった。

X・それから（後書き）

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。
水音灯と申します。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。

この物語を読んでくださってありがとうございます。

暫定的に。

魔王とヒトの子の物語はここで終わりです。

もしかしたら続きを書くかもしれませんが、

今のところは更新終了とさせていただきます。

この作品は、2007年2月ごろにサイトで連載していた作品に
加筆・修正したものです。

感想・ご批評・誤字脱字のご指摘など、いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5433b/>

Truth ~ 邂逅の夜 ~

2010年10月13日17時15分発行